

第一部 作戦準備から終戦まで

第一章 連合軍の攻勢と先島群島の防衛

(1) 航空決戦に備えて飛行場設定

ニミッツ大将の率いる米中部太平洋進攻軍の鋒先が内南洋に向けられ始めた昭和十九年初頭先島群島には西表要塞部隊、南方との中継基地としての海軍飛行場、地元編成による特設警備隊（宮古・八重山にそれぞれ二個中隊、平常は将校、下士官数名が所在、動員下令によって部隊を編成する。武装は小銃のみ）及び小規模の陸海軍通信隊が所在するだけで、まさに兵装ストリップとも云うべき状態だった。

米中部太平洋軍の進攻速度が予想以上に早いことに驚いた大本営は米軍はその強大な機動兵力を駆使してヒリッピン、台湾又は小笠原諸島を飛び越えて一気に南西諸島に突進して来る公算も少くないとして急ぎ同方面の防備強化を図る要ありと判断、三月中旬大本営参謀杉田一次大佐を班長とする現地視察班を派遣して南西諸島の全域にわたって現地踏査を遂げしめた結果、これらの諸島は延々数百マイルにわたって航空基地の適地を形成、今後の航空決戦には第一級の要衝であり、速かに多数の飛行場を新設し、有力なる地上兵力を配置してこれを防衛するのが至当であるとされた。

越えて三月二十二日大本営直轄の第三十二軍（軍司令官渡辺正夫中将、参謀長北川潔水少将）が編成され、遅ればせながら南西諸島防備はようやく緒についた。然しこの時点では航空戦力造成が第一義とされ、第三十二軍に編入予定された兵力は僅かに独立混成旅団二個と歩兵一個聯隊に過ぎなかった。当時戦火は未だ南洋やヒリッピン近く迄は及んで居らず且又大本営は内南洋壕北戦線の強化に追われ、南西諸島の防備強化迄は手が回らなかった。従って防備力も敵の小規模奇襲に備えることが主眼であった。

南西諸島の防衛を担任した第三十二軍は直ちに先島群島の現地視察に乗り出し、三月中旬先ず八原高級参謀、同三十日には渡辺軍司令官が幕僚を帯同して来島、引き続き五月十四日船舶参謀八坂少佐、同十五日航空参謀釘宮中佐、六月十二日には渡辺軍司令官が再度来島するなど軍首脳の間を往來を接し、その動静はようやく慌ただしさを加えてきた。これら一連の視察の結果、宮古島は島全体が平坦で起伏に乏しく、航空基地としては最適であると判断され、大本営では既設の海軍飛行場（平良町鏡原地区）の外に下地村東南部に二個所（城辺村加治道にも計画されたが、のち中止された）の飛行場を大急ぎで建設することを決め、この工事にあたるため、満州から第二〇五飛行場大隊（吉岡軍一郎大尉、のちに少佐、兵力およそ五百名）が転用発令（三月二十二日）四月三日ハルビン、孫呉を出発、釜山、沖繩経由で五月八日漲水港に上陸、町内西里の上布織物工業組合事務所本部を構え、飛行場設定に着手した。これより先き五日には要塞建築第八中隊（兵力およそ百名、岸川善二大尉）が門司経由、到着している。この部隊は主として野原岳戦斗司令部所壕の築造にあたった。

この頃の宮古地区は決戦下とは思えない程人心も平穏で差し迫った危機感を感じられなかった。勿論深刻な物資不足と動員徴用に伴う生産の低下で日常生活は著しく窮屈となり、街には国民服やモンペ姿が増え戦時気分は横溢していたが、官民の戦意は聊かも衰えず、防空演習や軍事施設の設定のための勤勞奉仕にも積極的に協力することをおしまなかった。食糧は昭和十五年から主食の米が配給制となり、十分ではなかったが、海上交通は細々ながら維持されていたのでさほど深刻ではなかつ

た。

しかし五月に入って陸軍の正規部隊が送り込まれ、街にはカーキ色が氾濫、これと併行して二カ所の陸軍飛行場工事が急ピッチで進められ、多数の老若男女が作業動員されるに及んで一般市民の間には次第に戦局の前途が容易ならざるものであることが認識せられるようになり、且有識者の間には相次ぐ玉砕、船舶の遭難（昭和十八年秋から末にかけて貨客船嘉義丸Ⅱ二、五〇九トンⅡ同じく湖南丸Ⅱ二、六六四トンⅡが何れも大島近海で米潜水艦の雷撃を受け沈没、犠牲者多数を出す）などがさざやかれ、一種の厭戦敗戦感が漂い始めていた。

（註）昭和十六年六月以降主なる船舶は船舶運営会の手で管理運営された。当時宮古―那覇―基隆間の海上輸送は主として慶運丸Ⅱ大阪商船一、九二一トン）と小型機帆船によって維持されていたが、十九年夏以降は軍輸送船に依存するようになった。

飛行場工事は防諜上、緊急工事と云われ、下地村野原を中心に中飛行場、与那覇を中心に西飛行場、八月以降は第二十八師団主力も動員されて昼夜兼行の突貫工事が強行され、十月五日に完成した。西飛行場は地形上難点があり、重点は中飛行場に置かれた。この工事は機械力は用いられず、専ら人力により、工具も円ビ、ツルハシと云う非近代的なものが主で、能率のあがらないこと夥しいものがあつたが、航空戦力を重視する中央の熱心な督励と現地軍官民一体となつての熱意と苦勞が実を結び、巾五十メートル、長さ千五百メートルの滑走路二本と誘導路、掩体燃料貯蔵施設などが出来上がった。

（註）この飛行場用地の接収は昭和十八年十月から十九年五月にかけて行なわれ、海軍飛行場が五十二万五、一八二坪（地主二五五人）陸軍飛行場が三十四万六、八二二坪（地主一一七名）西飛行場が十五万五、〇〇四坪（地主六十八名）で、買収には現金又は公債が支払われたが、陸軍関係は殆んど公債で、戦後支払い凍結されたのが多い。

現在この土地は国有地として大蔵省の国有財産土地台帳に記載されているが、最近では旧地主の間から返還を望む声が強くなり、戦後大きな未解決

決事項として尾を引いている。

(2) 先島守備隊の配備

昭和十九年二月十七日米機動部隊は日本聯合艦隊の根拠地トラック島を急襲、所在航空兵力及び艦船、軍事施設等に壊滅的打撃を与え、内南洋の守りは危殆に瀕した。このため南西諸島は米軍の不意打ちを受ける懸念が生じてきた、当時の南西諸島の兵備は僅かに中城、西表両要塞と特設警備隊数個中隊が配備されているだけで、潜水艦による攻撃にも耐えられない状態だった。

三月には第三十二軍が編成されたもののその主力となるべき混成第四十四、同四十五旅団は未だペーパープランの域を脱せず、五月三日になつてようやく正式に第三十二軍の隷下に編入された。然し両旅団共編成未完のため、沖繩到着は六月を待たねばならなかった。

五月二十日第三十二軍司令官は独立混成第四十五旅団長宮崎武之少将に対し、先島群島防衛の任務を与え、次の如く軍隊区分をきめた。

先島守備隊

長 独立混成第四十五旅団長
宮崎武之少将

部隊 独立混成第四十五旅団（主力は宮古島、一部は石垣島）
特設警備隊二百九中隊、同第二百十中隊、第二百五飛行場大隊
宮古島陸軍病院、要塞建築勤務第八中隊（以上宮古島）重砲兵
第八聯隊、第二百二十八野戦飛行場設定隊、特設警備隊第二百二十六中隊、同二百二十七中隊、船浮陸軍病院（以上八重山）
任務 東経一二六度以西東経一二二度三〇分にわたる先島及び尖閣列島の防衛並びに宮古、石垣両島の航空基地設定
先島守備隊長宮崎武之少将（26期）は五月十日付けで豊橋陸軍予備士官学校長より独立混成第四十五旅団長に転補、朝鮮の旅団長より独立混

(3) 満州から大兵力転用

成第四十四旅団長に転じた鈴木繁二少将（26期）と共に福岡に至り西部軍司令官下村中将の命を受け、二十二日空路那覇へ向い、第三十二軍渡辺軍司令官に申告、任務を付与された、当時第四十五旅団は香川、愛媛高知、徳島の四県に於て徵募編成中で、未だ沖繩へは送られていなかった。（第四十四旅団は九州で編成中）渡辺軍司令官は両旅団長に対し、沖繩の状況を説明し、急ぎ徵募区に戻り、現地の状況に慮することく、その編成裝備に遺憾なからしめるよう命じた。よつて両旅団長は再び福岡に戻り、西部軍司令官にこの旨を報告、それぞれ隷下各部隊を巡回指導したのち、共に福岡経由、那覇へ戻り、宮崎旅団長は六月二十二日宮古島に到着、平良町西里の織物工場事務所を司令部を開設、所在部隊をその指揮下に収めた。六月中旬頃九州、四国地区で編成を終つた独立混成第四十四、同四十五旅団主力は同月二十五日第三十二軍兵器勤務隊、第二百二十九野戦飛行場設定隊、宮古島陸軍病院などの要員と共に富山丸（七、〇八九トン）に乗船、鹿児島を出港して南下したが、二十九日あさ七時二十分頃徳之島東方沖で米潜水艦の雷撃を受け、一瞬にして沈没乗船部隊およそ四千六百名中、三千七百名が遭難死するという全滅に近い損害を蒙つた。生存者は奄美大島古仁屋に收容され、沖繩本島及び宮古島へ送られたが、指揮官クラスは殆んど死没して戦力なく、七月から九月にかけて再編基幹要員を本土から輸送し現地召集者を加えて再編成された。

富山丸の遭難により南西諸島の兵力配備計画はやり直しの必要に迫られ、防衛準備は初期に於て出鼻を挫かれた結果となつた。大本営は沖繩本島及び大東島の急速配兵のため、部隊の空輸と艦艇輸送を計画し、また先島方面強化のため、第二十八師団（在チチハル、歩兵第三十六聯隊欠）の第三十二軍編入を発令（六月三十日）引きつづき独立混成第五十九、同六十旅団などの諸部隊を宮古地区に増兵することをきめ、九月末迄に配置を終つた。然しこれらの部隊は状況の変化に応じて逐次投入されたため、現地軍の作戦準備は度々変更を余儀なくされ、地上作戦計画の遂行に尠からず支障を来たした。

これより先大本営では先島方面の防衛強化のため、第二十八師団の転用をきめ、六月三十日付で第三十二軍編入を発令した。同師団は昭和十五年七月、第一、第二、第九師団から歩兵一〇聯隊と特科部隊（砲、工輜、騎兵）の基幹要員を抽出、内地から兵員を補充して編成された新設師団で、兵は少数の補充兵を除く外は殆んど現役、下士官は三分の二が現役、将校は尉官クラスが予備役、佐官以上は大半が現役で占め、特に戦力の根幹となるべき歩兵部隊は日清、日露役の歴戦に輝く第三、三十三十六の各聯隊、砲兵は山砲聯隊で局地山地戦に適すように装備されていた。当時としては日本陸軍の精銳師団の一つに算えられていた。師団は対ソ戦に備えてハルビンに駐留していたが、防諜上の理由その他で二月十四日チチハルに移動した。六月十八日歩兵第三十六聯隊（平野義一大佐、26期）は大本営から応急派兵の命令を受け、二十二日チチハルを出発して二十六日金山に着いた。同日在比島第十四軍編入を発令、七月三日金山出港後行先地が沖繩に変更されたことが判明、七日呉から海軍艦艇で沖繩へ向かい、十日中城湾に到着、同月中旬機帆船に分乗して大東島方面に送られ、同方面の警備に就いた。

一資料によると同聯隊は当初サイパンへ増援兵力として送られることになつてしたが、状況急変のため中止、今度は在ヒリッピン第十四軍に編入され、マニラ行きが内定していたが、大東島方面の状況が急迫したため行先地が三度び変更されたもので、七月四日付を以て第三十二軍編入となった。
六月二十六日大本営は第二十八師団に対し、上海集結を命じたが、三十日第三十二軍編入に伴ない、集結地が金山に変更され、七月一日頃から列車輸送でチチハルを出発、十五日頃金山集結を終つた。このような行先地の目まぐるしい変更は当時のマリアナをめぐる状況が急変、中央の対処策が度々手直しを余儀なくせられたことを物語っている。

出戦に際し檳洲師団長は次の如く訓示し、全將兵の決意と団結を促した。

訓示

茲ニ、大命ヲ奉シ征途ニ就カントス男子ノ本懐之ニ過クルモノナシ惟フニ兵團創設後四年ニ亘リ夙夜至猛ノ訓練ニ邁進セシ所以ハ実ニ今日ニ備ヘンカ為ナリキ今ヤ当司令部トシテモ至敵ナル軍紀ノ下鉄石ノ団結ヲ鞏メ又克ク隷下部隊トノ間ニ強靱ナル紐帶ヲ結成シ百難不撓ノ態勢ヲ確立シ得タルモノト信ス

諸子亦今日ニ臨ミ自ラ深ク期スル所アルヲ信スルモ今ヤ戦局ハ益々重大ニシテ兵團ニ負荷セラルヘキ任務ハ正ニ至重至大ナルモノアルヲ予察スルニ難カラス諸子ハ宜シク予ネテ訓諭スル所ヲ想起シ司令部ノ責務ヲ銘肝シテ万事ニ亘リ率先垂範スルト共ニ和親団結ヲ以テ衆心ヲ城ト為シ準備ノ周到ヲ以テ常ニ待ツアルヲ恃ムノ境地に達シ如何ナル大敵ヲモ粉砕セスンハ巴マサル敢闘精神ヲ夫々実敵ニ対シテ実証シ真個タル兵團ノ伝統精神トシテ之等ヲ確立センコトヲ期セサルヘカラス

諸子夫レ自重自愛シ各々本分ノ完遂ニ聊カ懈怠ナク且其武運ノ多幸ナランコトヲ祈ル

昭和十九年七月二日

第七八六隊長

以上のような一札を経て第二十八師団の宮古島転用がきまり、師団長檳洲鎮一中将(24期)は七月九日飛行機でチチハルを出発、奉天經由十一日金山に到着、師団主力の輸送指導にあたった、これより先参謀長福地春男大佐(32期)は部下を伴って七月五日那覇に先行、第三十二軍司令部へ出頭して諸般の打ち合わせを行なったのち、七日宮古島へ乗り込み、県立女学校を司令部にあて作戦準備に取りかかった。

檳洲師団長は陸路参謀、堀江専属副官を帯同、十六日金山出發、空路福岡經由沖繩へ向い、十八日那覇に到着、第三十二軍渡辺軍司令官に到着を申告、諸般の打ち合わせを行なったのち二十日宮古島へ進出した。

於て野砲より劣るのが短所とされている。

(4) 長少将の現地視察

六月三十日第二十八師団の宮古島方面配置がきまり、大本営はようやく南西諸島の防衛準備に本腰を入れ始めたが、七月七日長勇少将(28期)の一行が大本営から派遣され、宮古島を訪れた。同少将は関東軍司令部付として在満していたが、六月中旬サイパン島奪回作戦の要員として東京へ招致された。然しマリアナ沖海戦で聯合艦隊が一敗地に塗られた結果、サイパン島放棄がきまり、同少将は六月二十七日参謀本部付となった。大本営は第三十二軍の作戦援助のため、長少将を沖繩へ派遣した。同少将は沖繩本島を始め大東島などの兵備を視察研究すると共に非戦闘員の疎開についても研究する使命を帯びていた。

長少将は第二十八師団の宮古島進駐準備のため、七日宮古島に先行した師団参謀長福地春男少将(32期)及び独立混成第四十五旅団長宮崎武之少将と会い、先島防衛作戦準備について研究討議すると共に二日間にあつて現地を踏査、九日次の要旨の電報を参謀次長あて送った。

一、七日及び八日宮古島を偵察し、同島の配備と戦法について独立混成第四十五旅団長と派遣された第二十八師団参謀長に了解させた
二、宮古島は各方面から上陸可能で攻め易く守り難い。米軍が同島を占領すれば一カ月で一、五〇〇機、周囲の小島と共に二、〇〇〇機の大航空根拠地を設定し得るものと判断せられる。宮古島は本土の航空燃料を涵濁させる目的で南西諸島攻略のため米軍が指向する攻撃重点と判断する。

三、宮古島確保のためには一コ師団と一コ旅団、また伊良部島には一コ聯隊の守備兵力は絶対必要である。装備として迫撃砲のほか爆薬少くとも七十トン及び発煙剤をなるべく多くすることが絶対必要である。

四、宮古島は水の問題が重要で、作井隊(井戸を掘る部隊)一〇を急

これより先き七月十四日第三十二軍司令官は第二十八師団長に対し「一部ヲ以テ西表島及石垣島、主力ヲ以テ宮古島地区ノ防衛ニ任スルト共ニ宮古島及石垣島ノ航空作戦準備ヲ継承セシメ且所在航空部隊ノ援助」を命じた。

第二十八師団は在満当時歩兵团司令部(団長は少将で歩兵三コ聯隊を指揮して戦斗にあたる)を持っていたが、歩兵第三十六聯隊が隷下から離れたため、歩兵团司令部は軍令によって除かれたと、陸路参謀は戦後述べている。

(註)師団の固有編成は昭和十二年頃迄は一般に歩兵四個聯隊(二個旅団)を基幹に輜重、搜索(騎兵)、砲兵(山砲の場合は駄馬、野砲は車輜編成)工兵などの特科部隊を加え、兵員数およそ二万名(戦時編成)となっていたが、十三年頃戦局の拡大に伴って師団の数を増やす必要が生じ、一般に歩兵三個聯隊基幹に特科部隊を加え、兵員も一万五千名から一万八千名を基準とするように改められたが、沖繩戦で玉砕した第六十二師団のように独立歩兵八個大隊(二個混成旅団)を基幹とする警備師団も若干存在した。

又満州、支那大陸、ビルマのような広大な戦場に使用された師団には通常、師団司令部の下に歩兵团司令部と云う指揮機関が置かれ、歩兵团長(少将)が歩兵三個聯隊を指揮して戦斗にあたったが、サイパン、硫黄島、沖繩のような島しよでの作戦に使用された師団には歩兵团長は置かれず、師団長が戦斗を指揮した。これは島しよでの戦斗が陣地戦中心になり、機動の余地が少ないので、歩兵团長のような指揮段階を余り必要としないのによるものと推定される。

なお第二十八師団は山砲師団で野砲編成の師団に比べて火力は劣るが大陸の戦場に適するよう機動力を重視され、当時としては数少ない騎兵聯隊を有していたが、同師団が島しよの守備に向けられたため、馬匹の大部分を原駐地に残置、歩兵なみの装備に改編された。山砲は挽馬編成なので、地形の不利な山岳地帯や難地に適するのは長所だが、破壊力に

派し、且セメントの急送を要する。

七月八日沖繩派遣中の長少将は第三十二軍参謀長に補職された。同少将は十一日上京して大本営に状況報告を行なった。この際参謀総長に対して南西諸島防衛のため、最小限六コ師団と一コ連隊を必要とすることと、作井隊及び爆薬の必要性、非戦闘員の台湾疎開、貨物廠の設置などについて意見を述べた。

同少将は参謀長補職後数回宮古島を訪れ、作戦準備の視察指導を行なった。二十年三月中将に進級、六月二十三日牛島軍司令官と共に自決、沖繩で骨を埋めた。

(5) 歩三、騎二十八連隊の海上輸送

第二十八師団の宮古島転用について元騎兵第二十八聯隊長、上田巖大佐、元歩兵第三聯隊長怡土軍大佐は当時を回顧して要旨次の手記を寄せている。

(上田元大佐の手記)騎兵第二十八聯隊は昭和十九年七月上旬、廿八師団の宮古島転用にもなつて、満州フルルギを出発、途中装備変更のため軍馬五百頭を原駐地へ返し、朝鮮金山に集結した。七月二十二日輜重兵第廿八聯隊(横山伊一郎大佐)と共に八千トン級の輸送船に乗船、横山大佐の輸送指揮で釜山を出発、同日門司に着いた。門司港で六千トン級の輸送船に乗り替えよとの命令で一昼夜で不眠不休の積み替え作業を実施、二十五日門司港を解纜。敵潜水艦の攻撃を考慮して昼間だけの航行で二泊三日を要して鹿児島湾に集結した。船内は三段装置の棚に坪当り十二・三名の割合いで詰めこまれた兵員はろくに膝を伸ばすこともできない程の窮屈さ。しかも酷暑の候とて船内は蒸風呂のような暑熱で兵員の苦痛思いなかに過ぎるものがあった。

全將兵一日も早く宮古島に上陸して守備の任に就きたいと焦るが、老朽船のうえに使用過度で機関整備の余裕なきため、鹿児島港より船団を編成して出港したるも種子島までの途中に於て機関故障のため、二度も

鹿兒島に引き返し、およそ一ヶ月近く足止めの上止むなきに至った。かくては任地着を待たずして兵員の損耗を来たす虞れあり、交渉の結果、一泊二日の半数交替にて西桜島に上陸を許し、民家に休養せしめられた。

八月十七日、第三回目に船団を編成してようやく鹿兒島港を出発、途中、懸念された敵潜水艦の攻撃を受けることなく、二十日一時慶良間に退避、第九師団を乗せた三縦陣の大船団が那覇港に向うのを遠望、互いに武運長久を祈願、二十二日待望の宮古島に上陸することができた。

上陸後早速女学校の師団司令部を訪れ、横山伊一郎大佐と共に到着を申告、榎淵師団長より防衛方針、兵力配備の概要、敵の企図判断など指示を受け、廿八聯隊の任務を附与された。

(元歩兵第三聯隊長怡土大佐の手記) 連隊は南方転用の命を受け、ソ満国境の警備を他部隊に移譲して出発した。上海乗船説しきりで行先不明。満州を南下中、急に釜山集結に変更しておよそ一週間船便を待ち門司へ向った。出発に当り、電波探知機の装備なきため、肉眼にて敵潜水艦を監視せよとの指示を受け、内心びっくりした。関釜間でさえも敵潜水艦が出没するようでは戦局は容易ならざる段階まで至っている。これは只事ではないと感じたが、聯隊長(怡土大佐)は師団でも唯一人の功三級拝受者の歴戦者であるので、聊かの不安の色をみせたものでは部下に及ばず影響がさるに思いを致し、努めて平静を装った。幸い途中で敵潜の襲撃を受けることがなく、全員無事宮古島に到着、南地区の守備に任じた。山砲兵第二十八聯隊長梶大佐は陸士同期で平素から昵懇の間柄だったので、協同作戦準備もスムーズに運び、万事都合だった。

一部は軍艦で急派

大本営では宮古島の護りを急ぎ強化するため派遣部隊の一部を軍艦で輸送した。すなわち山砲第二十八聯隊主力は七月二十日巡洋艦「鹿島」で釜山発、八月十二日宮古島着、又歩兵第三十連隊主力も巡洋艦で七月二十五日到着している。

(6) 先島守備隊を改編強化

第二十八師団の宮古群島配備に伴って先島守備隊(宮崎旅団長指揮)は先島集団(固有の編成ではなく、戦斗がし易いように各部隊を組み合わせた軍隊区分、規模は師団と軍の間くらいにあたる。小笠原地区集団、マリアナ地区集団もその例)と改称、宮崎少将麾下の独立混成第四十五旅団(独立歩兵七個大隊編成だが、二個大隊は第九師団の台湾転用に伴う兵力不足を補うため第三十二軍司令官の直轄に入れられ沖繩戦に参加、玉砕した)は八重山群島守備を命ぜられ、宮崎旅団長は八月二十二日石垣島へ出発した。

石垣島には宮田金吾少佐の率いる独立大隊が先遣され、警備に任じ、外に海軍警備隊が配備せられていた。同旅団は海没後再編成され、兵員の四割を現地及び沖繩、宮古から召集、補充して九月編成を完了、与那国島を含む八重山群島全域に兵力を展開して米軍の進攻に備えた。

(註) 旅団長宮崎武之少将は熊本県出身、陸士二十六期、大正三年歩兵少尉任官、天津駐屯歩兵第二聯隊長、豊橋陸軍教導学校長、豊橋予備士官学校長などを歴補、資性温厚、人格高潔、部下の信望厚く、戦後無事復員して現在鎌倉市で余生を送っている。

第三十二軍関係の陸軍将官としては唯一人の現存者

大本営では第二十八師団の宮古島転用発令に引きつづき七月二十四日独立混成第五十九旅団(多賀哲四郎少将)と同じく第六十旅団(安藤忠一郎少将)を第三十二軍に編入、現地軍の意見をも参酌して宮古島に配備することをきめた、両旅団は満州で八月中旬頃迄に編成を終わり、釜山から海路輸送され、九月下旬頃宮古島に上陸している。この外各種の配属部隊が相次いで先島集団長の指揮下に入れられ、十二月頃迄に所定の全兵力が展開を終わった。最終的には宮古群島所在部隊の総兵力は多くの配属部隊を合わせ陸軍のみでおよそ二万八千名、海軍部隊を合わせれば三万名を算える強大なものとなった。昭和十九年十月頃の各兵団司令

部の幹部陣容は次の通りである。

第二十八師団

- 師団長 中将 榎淵 鎭一(24)
- 二十年一月以降 参謀長 少将 納見 敏郎(27)
- 参謀長 少将 福地 春男(32)
- 二十年二月以降 参謀(後方) 大佐 一瀬 寿(32)
- 参謀(後方) 中佐 陸路富士雄(38)
- 参謀(後方) 少佐 杉本 和朗(42)
- 〃(作戦) (二十年三月中佐進級)
- 高級副官 中佐 浜 久(39)
- 次級副官 少佐 清野 清智(特11)
- 兵器部長 大佐 幸田 畔造(26)
- 高級部長 少佐 上田 幸吉
- 経理部長 主大佐 三浦 信一
- 高級部長 主少佐 角田 醇平
- 軍医部長 医大佐 脇田 豊
- 高級部長 医少佐 打田 直
- 獣医部長 獣中佐 走尾
- 十九年十二月以降 獣大尉 富田 輝也(特12)

(7) 独混第59、60両旅を増加配備

九月独混59、60旅が増加兵団として、配備された。

独立混成第五十九旅団(碧)

- 旅団長 少将 多賀哲四郎(26)
- 高級部長 中佐 藪 伊寿郎(27) 次級部長 少佐 三沢 三雄
- 副官 大尉 小梨 貞三
- 軍医 少佐 塚本 泉
- 主計 大尉 石岡 秋保

(註) 59旅は十九年八月十五日満州公主嶺で編成、独立歩兵四個大隊基幹、大隊は本部、歩兵中隊三、歩兵砲、機関銃各一個中隊から成り主要装備としては重機八、連隊砲二、速射砲二門、旅団砲兵隊は本部一、中隊三、段列中隊一で編成、主要装備は迫撃砲十八門

独立混成第六十旅団(駒)

- 旅団長 少将 安藤忠一郎(21)
- 高級部長 中佐 甲木 誉一(39)
- 副官 大尉 冨宿 隆
- 兵器 少佐 松崎 公
- 主計 大尉 松尾源次郎
- 軍医 医大尉 西堀 東治
- 獣医 獣中尉 佐々木博一

(註) 60旅団は十九年八月九日満州牡丹江で編成、装備は59旅とほぼ同じ

なおこの両旅団は八月下旬から九月始めにかけてそれぞれ釜山を出発同月中旬頃宮古島に上陸している。

(多賀少将主要軍歴) 広島県出身、明治二十六年生、大正四年歩兵少尉任官、昭和二年陸大卒、朝鮮鎮海灣要塞、近衛師団、第十四師団各参謀、十四師団参謀長を経て昭和十七年少将、独立混成第十七旅団、同五十九旅団長、昭和三十年十二月二十七日病氣他界。宮古島では二十年五月迄伊良部島、六月以降は平良町(北地区)の守備を担当した陸士二十六期

(安藤少将主要軍歴) 秋田県出身、明治二十年十一月生、明治四十二年歩兵少尉、台湾歩兵第二聯隊付(台南高工配属将校) 関東軍司令部付、熊本聯隊区司令官を経て昭和十六年少将、十九年独立混成第六十旅団長、宮古島では東地区(城辺町)の守備を担当した。陸士二十一期、復員後二十九年十一月他界した。

海軍警備隊

海軍警備隊は昭和十九年九月迄は沖繩海軍根拠地隊宮古派遣隊と称していたが、同月五日宮古島海軍警備隊に改称、沖繩根拠地隊司令官の指揮を受けていたが、二十年五月高雄警備府司令官の指揮下に入った。警備隊主力の宮古島到着状況は明かでないが、八月末から九月にかけて呉を出港、輸送船日輪丸、第一日正丸等によって宮古島に輸送されている。

海軍警備隊の編成及び主要指揮官名は次の通りで、主な任務は海軍飛行場の防衛と対空戦、海軍砲台は敵上陸軍の撃攘にあった。指揮系統は陸海軍別々だが、陸上戦斗（敵上陸）に入った場合は陸軍側指揮官（先島集団長）の指揮下に入ることになっていた。警備隊本部は始め宮古中学校々舎に設けられていたが、二月以降は海軍飛行場北側の高地に移った。

宮古島海軍警備隊

司令 村尾重二大佐
副官 大尉 岩井
主計長 主大尉 三辺 佑介（？）
軍医長 医少佐 曾我 立巳
副官 中尉 新田 松雄
富田隊（十四センチ高角砲二門）
中尉 富田梅太郎
瀬野隊（十二センチ高角砲二門）
中尉 瀬野 卓也
湊隊（二十五ミリ機銃四門）
中尉 湊 要吉
斎藤隊（二十五ミリ機銃四門）
中尉 斎藤 明

平良港機銃陣地
入谷隊（二年式十四センチ砲二門）
少尉 入谷 勇三

第三一三設営隊 技術少佐 吉丸 藤吉
水上警備隊（特攻魚雷艇）

江口隊（三年式十四センチ砲一門）
兵曹長 江口善太郎

この外本部に十三ミリ、二十五ミリ機銃各二門を装備、水警隊、入谷隊を除き全部が防空部隊だった。

総兵力は終戦時の記録では一、七一四名となっているが、これは近海で撃沈された艦船の乗組員の仮入隊者や佐世保海軍工廠宮古島派遣隊、沖繩根拠地隊から連絡又は戦斗指導に来て帰れなくなった将兵若干名は含まれていないと思われる。

松尾大佐は十九年十二月付で館山砲術学校教頭より宮古島海軍警備隊司令に転じた。

(8) 軍首脳の往来踵を接す

八月に入り廿八師団主力、配属部隊の到着展開が進むに伴って宮古島防衛のため作戦準備は本格的となり、軍首脳の往来も次の如く頻繁をきわめた。

八月十五日 福地参謀長、台北で開かれた第十方面軍隷下、指揮下兵団参謀長会議へ出席。

二十九日 福地参謀長、兵団長代理として兵団長会議出席のため、首里の卅二軍司令部に参集。

九月四日 卅二軍参謀長、はぜ山参謀宮古島飛行場視察

十七日 卅二軍司令官牛島中将、高級参謀八原博道大佐、情報主任栗丸兼数少佐を帯同来島。廿八師団麾下の各部隊を初巡視視察。

二十六日 軍通信参謀三宅少佐来島。宮古島部隊の通信視察。

二十九日 三十日 榑淵師団長石垣島視察。

十月一日 陸軍省経理局長栗橋保正中将宮古島視察。

八日 榑淵師団長（福地参謀長、杉本参謀随員）第卅二軍司令部で行なわれた兵棋演習参加のため、那覇へ出張（この後十日に米艦載機の空襲が加えられた）

十六日 侍従武官坪島文雄中将来島。師団長より状況報告を聴取。陣地の一部及び中飛行場を視察、沖繩へ。天皇、皇后両陛下には師団長に日録の品を、将兵にタバコ、入院患者に御菓子を下賜された。

二十日 福地参謀長、在八重山独混第四十五旅団（宮崎少将）兵棋演習のため石垣へ（第三十二軍八原高級参謀、はぜ山参謀参加）

第二章 敵の企図判断と作戦準備

(1) 六航軍、先島方面来攻を予測

南西諸島に対する敵の企図判断については时期的に、又大本営、第十方面軍、現地軍、航空軍などの間に多少の相違が見られるが、昭和十九年初頭以降は大体次のようであった。

一、昭和十九年五月頃における第三十二軍の状況判断

イ、マリアナの線と同時に南西諸島に進攻する。

ロ、マリアナ奪取後十分準備を整えて二段攻撃式に南西諸島を攻略する。

ハ、依然島伝い戦法を採用、ニューギニヤ、比島、台湾を経由、あるいは一部を省略、南西諸島へ進攻する。

このうちではハの公算が大きく、その時期は二十年春頃になるものと

十一月二十五日 卅二軍栗丸参謀来島視察。
十二月五日 長参謀長、栗丸参謀台北出張の途次連絡のため来島
十一月 榑淵師団長、在石垣島部隊の教育及び陣地視察（杉本参謀、堀江副官随員）
十一月 軍航空参謀釜井中佐来島
二十一日 長参謀長、栗丸参謀来島、二十二、三の二日間女学校の司令部に於て宮古島防衛の図上研究のための兵棋演習実施。
（註）この兵棋演習とは彼我の態勢を想定した図面に基いて部隊記号を附したコマを動かして作戦計画を研究討議する演習で一般には大隊長以上が参加する）

予想していたが、(イ)(ロ)の場合も全然公算が絶無とは云えない。更に以上何れの場合でも米軍の戦力から推して大東島のような小島に足掛がかりを求めるような事はせず、南西諸島の大根拠地たるべき沖繩本島、或は宮古島に直接来攻する事が考えられた。

これにつき第三十二軍高級参謀八原大佐は戦後の回想で「現地軍では初めから敵の主攻が沖繩本島に向けられるだろうという見通しをもって、反面宮古島も油断が出来ないと考えられた。」と述べているが、諸般の情勢から推して先ず沖繩本島にやってくることはほぼ間違いないとしても、状況によっては宮古島が先になるという可能性もある得るといふのが当時現地軍側のほぼ一致した判断とされていた。

然し昭和二十年に入って敵の空襲が専ら沖繩本島に向けられつつあることや、執拗な偵察行動などから判断して次期進攻目標が沖繩本島に向けられることは九分通り間違いないとの見方が決定的となり、従って宮